

黄雷のガクトウーン異
聞 アイクラッドの
破壊者

OLDTELLER

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

物事には限度がある。

その限度から逸脱した規格外な男がソードアート・オンラインの世界に降り立つ。

ニコラ・テスラ（自称72歳）

黄雷のガクトウーンの主役である。

これは彼によって破壊された理不尽な世界の物語。

そう何事にも限度が必要という話

∞ 話 0 話 1 話

--	--	--

11 7 1

目次

1 話

『プレイヤーの諸君、私の世界へようこそ』

低く落ち着いた、よく通る男の声が、遙かな高みから降り注いだ。

『私の名前は茅場晶彦。今やこの世界をコントロールできる唯一の人間だ。』

そう始まった男の言葉が現実世界へのログアウトができない理由を語り、この世界からの物理的な脱出をプレイヤーの命をたてに阻止している事実を告げた。

SAOの開発ディレクター。

若き天才ゲームディレクターにして量子物理学者。

ナーヴギアというプレイヤーをこの世界に縛り付けるハードの基礎設計者。

茅場晶彦の言葉だけに、その言葉には単純に嘘だと否定できない説得力があった。

運命が導くとおりに世界は娯楽あそびの場から、命を賭けた戦場デスゲームへと変わろうとしていた。

そう、伝説の《白い男》。

この世界とは異なる歴史を歩んだ20世紀初頭の世界より訪れた雷の魔人の介入がなければ――。

茅場晶彦がプレイヤー達に絶望に連なる恐怖を与えようとした時、《白い男》――《電気王》ニコラ・テスラ――は、その姿を現す。

20メートルはあろうかという中身のない空隙が纏った真紅のフードつきローブに、相対するその姿もまた巨大だった。

「輝きを持つものよ。尊さを失わぬ若人よ。お前の声を聞いた。ならば、呼べ。私は来よう」

血のごとき赤に対するはその二つ名の一つが表すように白。

白い詰襟服はどこか軍服のようで。

首にたなびく襟卷マフラーの黒に僅かに蒼白い雷電を帯びて。

その両手に耀くは雷纏わせし機械籠手マシンアーム。

機械帯マシンベルトの稼動に伴って激しく瞬く閃光が走る。

――彼の瞳、輝いて――

――周囲に浮かぶ光の剣、5つ――

「絶望の空に、我が名を呼ぶがいい。――雷鳴と共に。私は、来よう」

それは古い物語の英雄のように、《白い男》――ニコラ・テスラはそう口ずさみ。

その僅かにさびを含んだ声にひるむかのように、茅場の名を名乗った赤のローブがゆるめく。

対するニコラ・テスラはローブになど目もくれず、広場に集まったプレイヤーを見下ろしていた。

全てのざわめきが止まり、《白い男》が再び口を開く。

「ソードアート・オンライン一萬のプレイヤー諸君。運命に呪われたお前たち、全員」

そこで一呼吸を置き、ニコラ・テスラは宣言した。

「——私が、この手で、救ってやる」

それが真実であるかどうか、集まった一萬のプレイヤーが考える間もなく、次の瞬間には5つの光の剣が眩く耀く電光を発し、全てのプレイヤーを飲み込んでいった。

そして蒼白い電光が全てを満たす中。

茅場が現れた時と同じ音。

リンゴーン、リンゴーンという鐘のようなアラームのようなその音に混じって、異形の鐘の音が響く。

それは代償を得て、ひとつの願いを叶えるという鐘の音に似て。

そして——一瞬の静寂の後、今度はソフトな女性の声が響く。

『ただいまより プレイヤーの皆様へ 緊急のお知らせを行います』

柔らかくはあるが茅場の声とは違う人工的な合成音声だった。

それはシステム音声。

システムの凍結を告げた声は現在時刻を告げ、ゲームのクリアを告げ、最後にプレイヤーのログアウト処理を行うことを告げた。

そして次々と一万人のプレイヤーの気配が耀きの中で消えていき。

「なんとというかこれは——反則だよ。どうしたら、こんなに簡単に私の世界を奪うことができる?」

ただ二人残ったほうの一人、茅場の声が呆然とつぶやく。

「まるで性質の悪い二次小説のようだ。あり得ない事象が世界を歪める」

「月の王呼ばわりか。 仮初の世界でありえないもなからう」
チクタクマン

その声に応えるテスラの声は淡々と。

「仮初の世界でどのように遊ぶ方がお前の自由。 だがあの者達は、現の世界のもの。」

お前のおもちゃではなく、世界は——お前の遊び場ではない」

「いったい……貴方は誰だ? 英雄にしても規格外すぎるだろう」
ヒーロー

対する茅場の声には、どこか畏怖がこもって。

「私は世界の敵だ。 《史実の書》とは、遠くかけ離れた世界の御伽噺」

《雷電魔人》はただただ淡々と事実を告げる。

「——故に、現の世界ならばともかく、我が身に纏いし雷によつて創られしこの世界。壊すのは容易い」

「二次小説ではなく御伽噺か……：……どういふ意味かは解らないが、事実のようだ。それで私をどうするつもりかね？」

それは世界の創造主である茅場晶彦が出した敗北宣言だった。

「別にどうするつもりもない。ここは私の世界ではなく、現に私の居場所はない」

勝利したつもりもないとそう答え、テスラはどこか遠くを見つめた。

「それに、どうやらまた私を呼ぶ者がいるようだ。今度こそ彼の地。学園都市ならば

いいが——」

そして彼は名乗らぬままに何処かに去り、茅場が残ったアインクラッドは崩壊していく。

何の物語も生まずに。

創造主として茅場晶彦が光景はこんなものではなかった。

彼が望んだのは可能性であつて、幻想譚などではない。

実験は失敗だ。

命を淘汰する事でこそ生まれる可能性は閉ざされた。

どこかで誰かがそう告げたような気がした。

それは茅場晶彦の心の声だったのか？

もしテスラがそれを耳にしたなら彼の《発明王》の昏き意志と同質のものを感じただろう声。

「だからこそその世界の敵——か？」

悲劇の中でこそ耀く人の生を、見た事もない光景をただ見ることが願った非情の男。

無情な自然法則げんじつと確率すうじだけを信じる狂科学者。

人になりそこねた哀れな道化おろかも。

自らを敗残者と認定した茅場晶彦のつぶやきがアインクラッドに響く。

その孤独な創造主の言葉に答える者はすでにどこにもいなかった。

0 話

何十あるいは何百人目かの茅場晶彦のつぶやきがアインクラッドに響いていた時。

「やはり、これは月の王やつの仕業か。時間牢獄とは違い完全に同じ世界が閉ざされているわけではないようだが……」

幾度となく同じ時間軸のしかし別の平行世界で無数の人々を救いながらも、誰にも感謝されずただ忘れ去られる法さだめの《ふるきもの》の独白もまた世界の狭間に響いていた。

そう、同じ世界で時が巻き戻っているのではない。

世界の敵たる幻想ふしぎなもの故に、ニコラ・テスラにはその事実が判る。

「だからこそ、月の王やつがやりそうな実験じっけんではあるが——」

本当に月の王そとなるかみが企たくらみそうな悪趣味ではあるが、本当にそうなのかは判らない。

あるいは無限に連なる平行世界で生み出された仮初の世界を突き抜けているだけなのかかもしれない。

もし、そうならば電子世界に囚われた人々を助けずにただ通り過ぎたほうが、彼が本
来いるはずの世界にたどり着くためには、良い方法だろう。

彼の世界には打ち倒すべき敵がいるから。

ガクトウーンの鐘を打ち砕き、彼の地に降り立たなければならぬのだから。

マルセイユ洋上学園都市には、薔薇に呪われた10万学生が、なにより黄金の輝きが
待っている。

あの輝きがある以上、ニコラ・テスラが平行時空の狭間で迷うことなどはない。

だから、冷たい方程式に心を奪われた者なら、彼の行いを偽善となじり嘲笑うだろう。

そして、効率的で最も良い方法こそが自分達にとつて好い方法で、善きものなど何処
にもないと騙るだろう。

けれどニコラ・テスラは、それを好い方法だとは思わないし、善い方法ではないと断
言するだろう。

彼でなくてもそう思う者は多いはずだし、出来る事ならと心のままに正しいと思う事
を行う者も少なくはないだろう事例ではある。

だが、それが一度限りの労苦でなければどうだろう？

一つの世界を——それが仮初であるとはいえ——創造主から奪うのは、そう容易いこ
とではない。

嘘をつけない身である《ふるきもの》として口に出したように、壊すのは容易い。

だが淡々とした彼の様子に茅場晶彦が想像したほど、テスラの行つた偉業は易々と出来るような事ではなかつた。

そう、例え《雷電魔人》と呼ばれる彼にとつてさえ――。

重機関都市ニューヨーク《大消失》で失われた数百万の命――自身の助けられなかつたその百倍の人々を助けると誓つたニコラ・テスラならばこそ、その繰り返しを無為とも思わなかつたが、常人ならば同じに見える出来事の繰り返しを抜け出すために、救える命を見捨てていたかもしれない。

「あの男に月の王が干渉していたのなら――」

テスラに見捨てられたプレイヤー1万人の苦悩が望みなのか。

あるいはテスラの誓いなどは無意味であると認めさせたいのか。

これは実験なのだと嘯く《発明王》ロード・アヴァン・エジソンの声を思い出し、ニコラ・テスラは齒を噛み締めた。

かつて《雷の鳳》と出会つてより後、テスラから忘却は失われている。

《ふるきもの》の法さだめにより、彼自身が出会つたものからは忘れ去られてしまつても、テスラは全てを忘れない。

「テ・ケ・リリ」

テスラの覇気に応えるように雑音とも鳴き声ともつかない何かはその首元で響き。

テスラは次の電子世界アインクラッドが目の前に迫っている事に気づく。

そうして、《世界介入》を行うこともなく、電子世界アインクラッドの法則プログラムを瞬時に塗り替えた《雷電

魔人》は、ソードアート・オンライン一万のプレイヤーを救うため、新たなアインクラッドへと降り立った。

1話へ続く

∞話

「……か——」

俺は《ダイシー・カフェ》の無愛想な黒いドアに掛けられた無愛想な木札に書かれた【本日貸切】という無愛想な字を見ながら、誰言うともなくつぶやいた。

今日はアインクラッドで出会った《白い男》を覚えている者達が、彼に感謝するために集まったオフ会だ。

何故か《白い男》に関する記憶はS A Oプレイヤーの大半が失ってしまった。

憶えていた者達も不思議に直接的な記憶はあいまいになっていつている。

それは不思議すぎるほど不思議で、一時はそのニュースにとびついたマスコミも、今ではそんなのは幻だった。

集団幻覚の一種だと言い出し、都市伝説になってしまっていた。

それというのも、S A Oのデータが全てのコンピューター上から消え、茅場晶彦が逮捕された後も沈黙を守っているために、あの《白い男》の存在を証明するのは、俺達の記憶だけだからだ。

そして、その記憶さえも僅か数ヶ月前の事だというのに、徐々に薄れていつている。確かにナーヴ・ギアには俺達の脳を焼く仕掛けがしてあったのに、死者が出なかつたのも不思議なら、データ消失も不思議。

この事件は謎だらけで終わってしまった。

そして誰もが《白い男》の記憶を不自然に失っていく。

それなのに誰もそのことを気にもとめずにいる。

まるで、あの出来事が御伽噺かなにかだったように。

けれど——確かに俺達はあの《白い男》に救われた。

それを最初に忘れないようにしようといったのは、アスナ。

サークル《白い男研究会》の会長だ。

一時期乱立した《白い男》スレで知り合った女の子で、《白い男》の事を憶えていた俺

達は、それに賛同した。

何故かは解らないけれど《白い男》の事を忘れてはならないのだと感じていたからだ。

あの幻想ヴァンデルの世界の中にあつてさえ幻影まぼろしのような情景がとても大切なもののように想

えたのだ。

アスナもそれは同じで、そこから俺達は親しくなり、本名や個人情報交換するようになっていた。

彼女の本名も結城明日奈ゆうきあすなで、そのまま呼ぶと呼び捨てになるのだが、本人がそう呼んでくれというので、俺はアスナと呼んでいる。

ネットでは何度も会話やチャットをした相手だが、まだ実際に顔を合わせたことはない。

そう。今日、俺達は初めて会うのだ。

柄にもなく緊張で強張った表情を緩め、ドアを開けようとした時。

「キリトくん？」

後ろで電話越しでも綺麗な声だと思ったアスナの声がして——
そうして俺達は出会った。